

職業レディネス・テスト (VRT) の今日的意義と大学・短大での活用

はじめに

さまざまな形で、人は生涯にわたって職業と関わりをもって生きていきます。特に中学生・高校生の時代は、「自己の進路を探索し、将来の職業や生き方の大きな方向を決定する課題を担った時代」と言えます。実際、この時期にあつて、こうした課題をどのように解決していくかが、その後の職業選択や職業生活、ひいては生き方そのものに重要な影響を与えていくこととなります。

また、生徒・学生にとつては、将来の職業やキャリアと関連することになる進路選択という課題に、初めて向き合う極めて重要な時期でもあります。ところが、この時期の課題解決が先送りされた結果、将来のビジョンを何ももたないまま、大学等へ進学する若者が増えています。そのため、大学等になつてあわてて対策に追われているのが、昨今のわが国の状況と言えるのではないのでしょうか。もちろん大学等もその対策として、本誌連載「キャリアセンター通信」でご紹介しているように、学内・学外でのさまざまなキャリア支援プログラムに熱心に取り組んでいます。学生にとつて職業理解・仕事理解の重要性が増しているからです。その理解の一環として自己理解系の検査である「職業レディネス・テスト」(以下、VRT) が実施されることが多くなってきました。こうした背景を踏まえて、VRTのより良い活用のために、補足資料として「大学、短期大

学、専門学校等での実施のためのガイドブック」と「大学生等のための職業リスト」(以下、「職業リスト」) が作成されましたので、本来のVRTの意義とともに、大学等での活用について考えてみます。

■進路選択と大学生の現実

VRTの理論的背景である職業レディネスとは、職業的発達における準備の程度を示す概念です。そこには態度的な側面と能力的な側面の二つが含まれていますが、VRTで測定するのは、どちらの方向に興味・関心が向いているのか、また、職務遂行の自信度からは、できそうかできそうでないか、自信があるかないかといった、主に態度的な側面です。VRTは、単に、職業興味の特徴だけを捉えて職業とのマッチングを行うものではありません。大学期における進路選択では、卒業後にどのような進路をとるか、具体的には、就職するのであれば、どのような就職先を選ぶのかを決めることになります。

ここでの課題は、自分自身のさまざまな特徴を自覚して、将来の進路や職業について自らが選択できるようにすることです。自己と向き合う経験や職業探索からは、その後のさまざまな場面で遭遇するであろう、進路決定に関わる課題に取り組む態度やスキルが身につきます。そして何よりも自分の長所に気づき、十分な動機づけをもった選択行動につながるはずです。

また、具体的な職業選択行動におい

ては、解決課題に対する課題の認知の程度、意思決定のパターン、個人のパーソナリティ、個人の能力特性などが関与しています。選択行動には偶然とか、たまたまそうだったというのではなく、そこにはいろいろな心理的構えが現れます。この仕事が好きとか嫌いとか、やりたいとかやりたくないとか、できそうかできそうでないかなど、自分の行動パターンや自分の心理的構えに合わせて選択行動が現れてくるものです。

選択には理解が必要です。自己理解と職業理解を促すのはそのためです。人は理解する(分かる)ことで、選択(分ける)行動に移行できるのです。自己理解を促しながら、次の課題である就職レディネス^(*)についてもサポートせざるを得ない大学生の姿が透けて見えます。

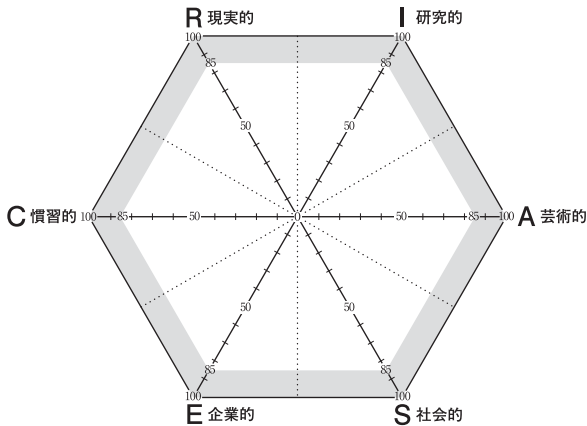
■VRTの特色

VRTの特色を要約すると、次のようになります。

生徒・学生がABCの3検査に回答することにより、職業に関する自分のイメージをチェックしたり、進路選択への関心を高めることが期待できます。各検査を個別に見ると、

①A検査(興味)では、職業・仕事に対する直接的な好みによる職業興味を測定することで、具体的な職業場面における自己の興味を理解できる。

②B検査(基礎的志向性)では、職業興味を明白に表明できない生徒・学



職業興味の6類型 (RIASEC) の特徴

R 現実的領域	機械や物を対象とする具体的な活動をするのが好き (例: 技術者、機械オペレーター)
I 研究的領域	研究や調査などのような活動をするのが好き (例: 研究者、学者)
A 芸術的領域	音楽、美術、文芸など芸術的な活動をするのが好き (例: ミュージシャン、デザイナー)
S 社会的領域	人に接したり、奉仕的な活動をするのが好き (例: 教員、販売員)
E 企業的領域	新しい企画を考えたり、組織を動かすような活動が好き (例: 放送ディレクター、会社経営者)
C 慣習的領域	定まったやり方にしがって、手堅い活動をするのが好き (例: 事務員、会計士)

生でも、日常の生活行動・意識についての質問を通して、興味の方向を測定することができる。

③C検査(自信)では、各種の職業・仕事に対する自信の程度を測定し、職務遂行の自信度という観点から自己の職業観を理解できる。

A検査(興味)とC検査(自信)の結果を同じプロフィール用紙上で対照することによって、本来の職業興味と経験から裏つけられた自信度から、よりダイナミックに職業志向性を捉えることができます。

例えば、興味と自信に差がある場合、その背景を探ることが重要です。自信は経験に基づくものですから、興味が高いのに自信が極端に低い場合には、①その領域にあたることで何か失敗し

た経験はなかったか、②その領域において相対的にレベルが高い集団にいたことで、自信をなくしてはいないか、または、③経験不足、などを探ってみるとよいでしょう。このような背景を自覚することで積極的に経験を積んでいくよう促します。

また、A検査とB検査(基礎的志向性)の対照からは、職業そのものに対する関心と日常生活での興味の方向を総合した個人の特徴を捉えることができます。一般興味やがて職業興味へと進化していくことは大いに期待できることであり、VRTのおもしろさは、

その両方を見ることができるところにあります。発達の職業興味を捉えることで、柔軟に個性理解を進めることができるのです。

■結果の見方・生かし方(ワークシート)の活用

「結果の見方・生かし方」(ワークシート)がこの検査のもつ一つの特長です。ここでは単に結果と職業の照合を行うだけではなく、職業の世界をイメージできるように六つの職業領域(ホルランドの6類型)で表わすことで、自己理解と職業理解(環境理解)へとつながるよう工夫されています。

この六角形は、職業の世界の6大陸ともいべき地図であり、これから職業世界に船出する若者にとっては、VRTから明らかになった自身のパーソナリティ特徴と職業の世界を結びつけてくれる、羅針盤の役目を果たしてくれるものです。職業経験の少ないこの時期の若者は、職業に対する知識がまだまだ不足しているため、社会にどんな職業があるのかを知ることがとても重要です。また、この時期の職業興味は、さまざまな経験や活動によって大きく変化していく可能性を秘めていますから、結果を固定的に解釈せず、将来を見据えたときに、どのような段階にあるかという視点を重視していきましょう。

例えば、進路選択への関心や意欲を高めるための啓発的活用例としては、VRTで明らかになった自身のパーソナリティ特徴と「仕事と職業の六角形」

および「職業リスト」の職業を関連づけながら、類似する職業や職業環境を具体的に調べることで、職業理解が進みます。この職業理解が進むことで、興味・関心のある職業がより一層明確に絞り込まれていきます。

自身のパーソナリティ特徴がどのような職業環境で最も活かされるかを想像(イメージ)しながらワークを進めていくことで、大学生にとって極めて重要な就業意欲や環境(職業)理解といった就職レディネスを大いに刺激し、次の課題に挑戦するためのエネルギー源になってくれるはずです。また、「職業リスト」はこうした大学生にも相応しい職業を網羅していますから、就職の目標を具体的に描くうえで大切なキャリアプランを設計するための手がかりが得られます。

■自立的な選択ができるように

「キャリア形成は選択の連続である」と言ったのはドナルド・E・スパーです。人生は選択が積み重なってできていく。今の世の中、選択肢なんかないと言われてかえせん。だからといって、自分が生涯をかけて人生を選択していくというキャリアの学習をしなくいいわけはありません。

また、選択するためには適切な情報が必要です。「職業リスト」によって、大学生のための適切な情報が加味されましたが、重要なことは、何を基準にして、どういう視点に立って、何を手がかりとして選択していくのか、ということなのです。

その選択は、今、目の前にある一つの選択をクリアすればよいだけでなく、これから先、人生の中で数限りなく繰り返されていく課題解決のための基盤ともなるものです。大学生にとって、自主的・自立的な選択ができるようになることは、とても重要なことです。

したがって、本人の選択行動に役立つしないなら検査をやる意味はありません。数値のみの結果票を一律に返却したり、断定的な結論のみを伝えたのでは、結果を理解し、自分の選択に役立てられる学生はごく一部に限られてしまいます。十分な解釈や説明がされない検査結果は、逆に本人の希望を妨げたり、意欲を低下させることにつながりだけです。

- そこで、検査結果の何を、どのように伝えるかが問われます。
- ①何を測定しているのか
 - ②標準得点の意味
 - ③本人の得点結果と意味
 - ④プロフィールの特徴
 - ⑤本人の特徴を活かせる職業環境の概要

以上のことを一人ひとりに説明し、さらには本人の感想や質問を聞きながら、個別支援の過程で活用するのが理想的です。大切なことは、結論だけを伝えるのではなく、その結論にいたる背景を含む内容が理解できるように説明することです。

■検査の外側を意識して

検査の結果には、個人のさまざまな


情報が反映されている半面、検査ではカバーし切れなかった情報が隠れています。

むしろ、検査結果を手がかりとして、どのように表現すれば学生が結果を理解し、受け入れられるかを考えながら伝えていくという姿勢が、こうした検査を活用するうえでのあるべき姿と言えるでしょう。検査ではカバーしきれない「外側」が存在するということを認識しなければなりません。それはVRTのみならず、適性検査等のツール全てが抱える問題でもあります。

特に本人が希望している職業が測定されない場合が問題です。この問題をカバーできるのは身近な教師やカウンセラーであり、本人が自分で気づかなければならない領域があると気づいてもらうことが重要です。

多くの大学生にとっては、学年が進むにつれて「就職活動(就活)」が現実味をもって迫ってきます。就職後の働き方や人生の過ごし方をイメージしながら自身のキャリアプランを考えるためには、どうしても自己理解と職業理解(環境理解)が欠かせません。自信をもって自らの課題に立ち向かう意欲(働くことや就職することに対する意欲)が最も求められています。VRTはこうした意欲を引き出してくれる有効なツールでもあるのです。


(*) 就職レディネス・就職活動サポートツールとして「RCC就職レディネス・チェック」が当会より発行されています。



職業レディネス・テスト[第3版]

大学・短大・専門学校等での実施が一層効果的に!!

大学生等のための職業リスト



1部50円(消費税込)

キャリアプランの参考になる305の職業名を、「職業興味(RIASEC)別リスト」と「基礎的志向性(DPT)別リスト」の2種類に整理した職業リストです。

検査の結果から明確になった自分の興味が、どのような職業に関連しているのかわかり、職業選択への関心を広げるために活用できます。

大学生以上を対象とした職業興味検査や各種ガイダンスツールで紹介されている職業や、大学生等が関心を持ちそうな職業を選んで掲載しています。また、「結果の見方・生かし方」のワークに掲載されている職業名がすべて含まれています。

大学・短期大学・専門学校等での実施のためのガイドブック

大学・短大、専門学校等で実施する場合の結果の信頼性や、結果解釈上の留意点について、まとめたガイドブック。

